



# 性別轉換

～女の子になってまで欲しかったボクの幸せ～

もちもち堂

学校でも家にも居場所がなかった。

何をしてでもドンケツで才能もない。

誰からも見てもらえない、まるで

空気のような存在

それがボクだ。

このまま大人になっても誰にも愛されず  
一人寂しく生きていくと思っていた。

突如ボクの前に現れた悪魔を名乗る  
男に会うまでは。

彼はある契約と引き換えに愛されたいという  
ボクの願いを叶えてくれると言った。

そう、女に変わって精液を集めるという契約の  
代わりに誰からも愛されるようになるという  
体してくれたのだ。



(ほわあ!すごい!  
本当に女の子になっちゃってる!)

鏡の前でくると回り全身を見てみるが  
何処をどう見ても元男となど分らない  
ほどの美少女に変わっていた。





（これなら契約っていうのも何とかかなりそうかな？あの悪魔もただセックスするだけで良いって言ってたし）

（……いや、まあ、男とセックスするのに抵抗はあるけどね）



「おい、何ドタバタしてるんだ！  
少し静かにし…」

「…あ、と、父さん」

少し騒ぎすぎてしまったのか父さんが  
大声をあげながらボクの部屋に入ってきた。



「……晴、か？」

「そ、そうだよ、何？」

「自分の子供の顔も忘れちゃったの？」

「あ、いや、そんな事はないが……」





(うわあ、やばい、すごいドキドキする。  
父さんと話したのいつぶりだろう?)

(:いや、それよりボクが女の子になっ  
たのを何も不思議がってない)

(これもあの悪魔の力なのかな)





「と、取り合えず休みだからといって  
あまり騒ぐんじゃないぞ」

「うん。その、ごめんなさい」

叱られると思い気落ちしてしまった  
ボクを父さんは今まで見たことのない  
ように慌ててフオローしてきた。



「いや、そこまで怒ってるわけじゃないんだ。  
ごめんな少し言い過ぎたよ」

「…？父さんがボクに謝った？」

「あの厳格で怖い父さんが？」

「ああ、そんな悲しそうな顔しないでくれ」



そう言っていると父さんはボクの腕を取り  
優しく抱きしめた。

「へ？あの、父さん？いきなり何を…」

「……」

「ね、ねえ…聞ってる？」





「ひうつ♡だめ、とう、さんっ♡  
そんなとこ、触っちゃ…っ♡」

「そんなこと言って本当は  
期待していたんだろ？」

「ほら、ちよつと触っただけで  
こんなに濡れてきたぞ」

どろっ

さわさわっ





「はあ…♡あ…っ♡だって…っ♡」

いやらしく下着を弄る感触に体が勝手に  
反応し声が漏れ、内側から溢れるような  
快感に愛液で下着を濡らしてしまう。

どろろ

はあ♡  
ハハハ♡  
ハハハ♡







(…んっ♡ボクこのまま男と…  
それも父さんとエッチしちゃうの?)

(…でも、いつもボクを見てもくれない  
父さんが今こんなに夢中になって  
くれるなんて…ちよつと嬉しいかも♡)

んっ♡  
んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡





「んっ♡はぁ♡あ…うくっ♡あ、あぁっ♡」

「父親に触れられてこんなにトロトロに  
オマンコ濡らしていけない子だな」

「ひうっ♡だってこんなにオマンコ  
弄られたら勝手にエッチな気分にな  
って来ちゃったんだもん」

どろろ

あぁ♡

ハァハァ♡

AKA  
AKA♡

(ひ、うつ♡やば、い…っ♡)

このまま弄られ続けたら気持ち良すぎて頭おかしくなりそうっ♡)

(こんなの我慢するなんて無理、だ…っ♡)

(だから…だから、ボクから父さんを誘ったって…うん、仕方ないよね)

どろろ

ハァハァ♡

んん♡





「…ねえ、父さん♥ボク、オマンコむずむず  
して我慢できそうにないんだ」

「だから、ね♥ボクのエッチなオマンコに  
父さんのおちんぽ入れて欲しいな♥」





「ふう…っ♡くうっ♡父さんのが、  
ボクのなか…に…っ♡」

内側を押し広げるように熱く硬い肉棒が  
ずぶずぶと自分の中に侵入してくる。

（なに、これ…っ♡ボク初めてなのに  
痛いどころか滅茶苦茶気持ちいいっ♡）

あぁあ  
うー

ズン



「う…っ！すごいいい締めりだぞ！  
こんなに父さんを求めてくれるなんて…！」

「ああ！私はなぜ今までこんな愛しい娘を  
ほったらかしにしていたんだ！」

「ひうつ♡あ、あぁっ♡  
とう、さん…っ♡とうさん…っ♡」

ズン  
ズン

ズン





(父さんがボクを愛してくれている♡)

耳元で囁かれるその言葉に背筋をゾクゾクとしたものが駆け上がり、獣のようにボクを求めてくれる父さんに嬉しすぎて体が勝手に腰を浮かしてしまう。





「はあ……はあ……！ 晴、好きだぞ！  
これからはもっと、もっと愛して  
あげるからな！」

「うん♡ボクも♡ボクも父さんの  
おちんぽすきい」

ズン  
ズン

ズン





「ひぐうつ♡奥そんなに  
ずんずん突いちや…っ♡」

「あ、ああっ♡おちんぽ子宮口まで  
届いて頭ジンジンしちゃうよ♡」

あ  
あ  
あ

ハ  
ハ  
ハ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ



「うおっ！引き抜くとき  
すごい絡み付いてくるぞ……！」

「そんなに父さんのちんぽを  
放したくないのか？」

「だって…だって、好きなんだもん♡  
父さん、もっと…もっとボクを見て♡  
ボクを感じて…っ♡」

ズッ

ズッ  
ズッ





「ああ…晴っ！出すぞ！晴のお腹の奥に  
父さんの精液いっぱい出してあげるからな！」

「うん、きてえ♥父さんの精液でボクの  
子宮の中いっぱい満たしてえ♥」

ズイ  
ズイ

ズウッ





どぴゅっ!びゅるるっ!

「あっ♡はあああ♡あっ♡あっ♡のでてるう♡  
父さんの赤ちゃんの素、沢山だされてるうっ♡」

びゅるる

あ  
あ  
あ  
♡  
♡  
♡

どゅっ



「はあ…っ♡はあ♡んっ♡これ、すごっ♡  
気持ちよくて腰、勝手にうごく…っ♡」

「おほおっ♡お、ああっ♡なん、なんで  
こんなあ♡」

はめっ♡

んっ

ゼッ

初めて父さんとしたあの日からボクは  
快楽を求め、今のように何度も父さんと  
セックスをする関係になっていた。

ずっ  
ずっ





んん

うう

ぞろ

ずず

「ひぐうっ♥んっ♥あくうっ♥  
お腹のおくう♥キョんキョんして  
気持ちいいの止まらないよっ♥」  
「う、あっ♥ん、んっ♥んっ♥あ、ああっ♥  
だめ、ボクもう…っ♥我慢できないっ♥」

実の父と恋人のように手をつなぎ淫らに  
腰を振る。部屋中に水音とパンパンと  
肌がぶつかる乾いた音が響く。  
それがより一層の興奮よび、ボクらは  
お互いを獣のように求めあった。

んん

アッ

ゼッ

アッ  
アッ





「…っ！私もだ、晴っ！出すぞ！  
このまま一番奥に…っ！」

「うん、きてえ♥父さんのあつつい精液  
ボクの中にちょうだいっ♥」

ハ〜っ♥  
ハ〜っ♥

はぁ♥

ゼッ

ずっ  
ずっ







あああ♡♡♡

びゅるびゅる♡♡♡

びゅる

はぁ♡♡♡

「お、おほおっ♡射精きたあ♡ひぐうっ♡  
お腹の奥にあっついのおちやビチャ  
出されて気持ちよくなっちゃってるう♡」

びゅるびゅるるるるっ！

びゅる  
びゅる  
びゅる

避妊など一切してないのを構わずに父さんは  
グリグリと腰を突き上げ射精する。

子宮の奥に精液をぶつけられる度、  
頭の奥がチカチカと白く染まってしまう。





「…もう♡あんなに出したのにおっぱい  
吸ってるだけでこんなにしちゃうなんて  
父さんは甘えん坊だな♡」

「こんなにおちんぽガチガチにして  
そんなにボクの手でシコシコされ  
ながら射精したいの？」

ちゅっ  
ちゅっ





(ふふ♪この前までボクを見てすらいなかった  
父さんがセックスしただけでこんな情けない  
顔をしながら今はボクに夢中になってる)



(…凄いな悪魔の力は)

(これさえ…この女の体さえあれば  
もうボクは誰にも愛されない可哀想な  
子なんかじゃないんだ)

ちゅっ  
ちゅっ





「う…っ！はるっ♡父さん、もう…っ♡」

「んふふ♡いいよ♡このままおっぱい  
吸いながら、ボクの手の中に出しちゃえ♡」

ちゅっ  
ちゅっ



ぶびゆるゝゝゝっ!

「…っ!んっ、んっっ!」

「あはっ♥父さんの白いデロデロおしっこに  
いっぱいボクの手の中に出てるよ♥」

ちよ



びゅ  
びゅ

(まさか父さんとああいう  
関係になるなんてな…)

悪魔と契約し父さんとセックスしたあの日  
から父さんは嘘のようにボクに優しくなった。

それだけでなくいつもボクを無視していた  
兄さんも普通に接してくれるようになって  
くれた。



（こんなに日常が楽しいなんて  
今までなかったな）

（そうだよ！ボクは皆から求められる  
こういう生活がしたかったんだ！）





「ふふ♪まさに順風満帆ってやつだね」

「……」

鼻歌を口ずさむほど上機嫌なボクは自分を見つめる兄の熱の籠った視線に全く気付いていなかった。





「はあ…はあ…んぐっ！く…っ！」

「ん」

ん  
ん

ん  
ん  
ん

ん  
ん

ん  
ん  
ん



夜、おそらく深夜なのだろう。

荒い呼吸と胸に挟まれた熱く硬い感覚に  
目が覚め、眼前でボクの上に跨り腰を振る  
兄さんと目が合った。





「う、あつ……晴っ」

丁度我慢の限界だったのか兄さんは胸の中へと射精する。ボクはそれを努めて気にしないようにまた聞き返した

愛の  
心

Am  
Am

「それで、本当に何してるの兄さん」

「うっ、ごめん。こんなレイプまがいの事して。  
…で、でも父さんと晴がしてたところ見たら  
俺もお前としくなっちゃって……」





(…あ、あはは♪すごいっ！あの兄さんまで  
ボクをこんなエッチな目で求めてくれる  
なんて！)





(ボクなんかじゃ何二つ敵わない天才で家族や  
学校での期待を一身に受けている兄さん)

(その兄さんが今、童貞みたいに必死に  
ちんぽ擦りつけてるんだ♡)

(どうしよう♡滑稽すぎて可愛くすら  
思えてきちゃった♡)



「もう、しょうがないなあ♡」

「いいよ、兄さん♡エッチしたくて  
パンパンに膨らましたちんぽ、ボクの  
オマンコで受け入れてあげる。」





「んっ♡いま入れてあげるからね♡」

ボクはそう言うのと服を脱ぎながら兄さんの上に跨り、熱く滾ったそれを秘所へとあて、ゆっくりと腰を落としていく。





「くっ…くっ…」

硬くそそり立ったイチモツは奥へと届くと同時に漏らすようにビチャビチャと射精し、温かい精液がじんわりと膣内に広がる。



「あはっ♥兄さんの精液、お漏らし  
したみたいにいっぱい出てるよ♥」

「う…あ、ごめん気持ちよすぎて…」

はめっ♥

はめっ♥

「んふふいいいよ、初めてだもんね？  
しょうがないよ」

「このまま抜かないで動いてあげるから  
イキたくなったらまたイっていいからね♥」



溢れ出る精液を潤滑油に扇情的に腰を振る。

快樂に必死に耐えている兄さんの顔が可愛くて、加虐心が煽られより二層激しく責めてしまう。







「晴っ！俺また…っ！」

「我慢しないで好きな時にボクの中で  
イちゃっていいからね」

「うっ！あ、あああっ！」

あ  
あ

あ  
ッ

フー

どろっ

あ  
あ



びゅぶるるるるっ！

「きた、きたあ♥兄さんの精液、子宮に  
びゅっ、びゅっでてるう♥」

「あっ♥ああっ♥ん、んくっ♥  
温かいのが広がって！気持ちいいっ♥」

あああ

フー

ドキ  
ドキ

どろっ

セックス  
セックス





(すごいな、童貞の兄さんでこれだけ気持ちいいなら、他のもつと慣れてそうな人相手だったらどれだけ気持ちいいんだろう?)

それを想像しただけで興奮で体がブルリと震えてしまった。

はぁ♡

はぁ♡

どろろ

びしょ



「晴ちゃん緊張してる？」

「あ、いえ…だ、大丈夫です」

(…って言っても流石に初対面の相手に裸を見せるのはちよっと恥ずかしいな)



ボクは今から会ったばかりのこのおじさんとセックスをする。

あれから好奇心を抑えきれなかったボクは出会い系アプリを使ってセックスの得意な人を探したのだ

まさか自分がこんな行動力があるなんて思ってもみなかった。



「何だかあまり慣れてなさそうだけど  
晴ちゃんって初めてかい？」

「いえ、そのセックスはしたこと  
あるんですけど…その、知らない人  
とは初めてで…」





「んっ……んちゅ、んむっ……ちゅる……んっ♡」

ボクが言い終わる前におじさんはボクを抱き寄せると、少し強引に舌で唇を割り口内へと侵入させてきた。

舌を絡ませながら唾液を流し込まれ口いっぱいにおじさんの臭いが充満しそれだけで頭が段々と朦朧とってしまう。





「ふはあ♡いきなりすぎですよ」

「ごめん、ごめん。少し強引だったかな。  
でもこれで緊張も解けただろ？」

「それは、そうですねけど…んっ♡」

おじさんはそう笑いながらボクのお尻を  
ムニムニと揉みしだく。その慣れたいやらしい  
手つきにボクの期待は高まり秘所からは愛液  
が溢れ出てしまう。

ちゅっ  
ちゅっ







「おい、さん、ボク、もう...っ♡」

「おいおい、自分だけイクのはダメだぞ、こっちも気持ちよくしてくれなくちやな」

「...え?」

ちゅっちゅっ

んんんんん

「こ、これでいいの？」

言われた通りにおじさんのちんぽを胸で挟む。

胸の中で熱くそそり立つそれがビクビクと  
脈打つ度、興奮と羞恥で心臓がドキドキと  
早鐘を鳴らしてしまう。



「ああ、いいぞ。そのまま涎を潤滑材にして  
胸で扱きながらチンコを舐めるんだ」

「う、うん…わかった、やってみる」







はぁ♡

ぐわん♡

ムン♡

ハ♡  
ハ♡

(雄臭くておいしい♡頭がぼーっとして  
勝手に口が動いちゃうよお♡)

(すぐ…っ♡この味と臭い…♡)

「はぁ…はぁ♡ん、んっ♡ちゅぷっ…ちゅ♡」



(ちよつとだけサービスのつもりでして  
上げるだけのつもりだったのに…っ♡)  
(舐めてるだけで頭の奥まで痺れる  
ような雄の臭いに犯されてるみたいで  
舌、止まらない…っ♡)



「あむ、ちゆる…んっ♡じゆる…っ♡」

「さっきまで恥ずかしがっていたのに  
今はおじさんのチンコにこんなに夢中  
になるなんて晴ちゃんはエッチな子だな」

「んちゅ♡…だっておちんぽ美味しくて  
口が止まらないんだもん」

ハ…♡  
ハ…♡

ちゅ♡  
ちゅ♡

ム…♡  
ム…♡

はあ♡





「そんなに喜んでくれるのはいいけど  
こっちで味わえばもっと気持ちいいと  
思うぞ」

「ひうつ♡」



足の指先で愛液でトロトロに溢れかえった  
秘所を軽く弄られ、それだけでボクはイって  
しまった。

「ほら、こっちは愛液でドロドロで準備万端だ」



「んっ♡ひあっ♡あ、あぁっ♡おじさんのおちんぽゴリゴリなかつて…っ♡」

「お、おおっ♡ボクのなか、広げられて…っ♡形変わっちゃう…っ♡」

「うぐっ…」っちもチンコ気持ちよすぎて腰止まらないぞ！」

どろっ

はぁ♡

ハハハ♡

いっ♡

いっ♡

あ♡あ♡





「ひあっ♡あ、あうっ♡そんなズプズプ  
されたらお腹…っ♡めくれちゃうよお♡」

「ん、ああっ！ひっ、あうっ♡」

「やば、これ…っ♡お、おくがあ、  
ごりごりってええええっ♡」

「だめ、これ、だめ…っ♡イっっちゃう♡」

どろろ

ハハハハ

ん

いっ！

いっ！

あっ  
あっ

「っ！っちも、もう出そうだよ。  
外に出すかい？それとも、このまま…」

「あっ♡あああっ♡外に出しちゃ…だめっ♡  
このまま…っ♡なか、が良いの♡」

「そうか、それじゃたっぷり  
出してあげないとな！」

どっ

っい

ん

いっ

いっ

あ





びゅぶるるるるっ！

「ひぎゅっ♡イク…っ♡イっちゃう…っ♡」

も  
あ  
あ

びゅ  
びゅ

ビョ  
ル  
ル  
ッ

ア  
ッ



子宮の奥に精液を叩き付けられると同時に  
絶頂した体が快感で跳ねあがる。

絶え間なく来る快樂の波に、もはや何の  
抵抗も出来ずにビクビクとイキっぱなし  
になってしまう。



「う…っ、ふう。すごいな、あれだけ出したのに  
晴ちゃんの中に入れてるだけでまた硬く  
なってきたよ」

「どうだい？おじさんはまだまだ  
出来るけど晴ちゃんは どうして欲しい？」



「はあっ…はあ♥んっ、もっと…欲しい♥  
もっと激しく、してえ♥」

ボクが腰を突き出しさらに求めると  
おじさんは覆いかぶさりまるで動物の  
交尾のような格好で腰を押し付けてきた。





「おほおっ♥あ、あぐうっ♥」

「うおっ！中がさつきより締め付けてくるぞ。  
チンコで「突きされただけでイクなんて  
ほんとドスケベだな」

「…っあい、イってない……♥  
イってなんてないよ♥」

「だから、もつと…♥もつと、ちようだい♥」

たの  
たの

あ  
あ  
あ

は  
あ

は  
あ



媚びるような声でおじさんを求めもっと  
欲しいと言わんばかりに自分から腰を  
押し付ける。

そんなボクにおじさんはいやらしそうな  
顔を向けより強く腰をぶつけてくる。





「ふ、くうっ♡あ、ああ…♡そこ、いま  
敏感になってる、から…っ♡」

「あああ、あっ♡あうっ♡だめ、これ以上  
され、たら、ボクもう…っ♡」

「出すぞ！このまま中で受け止めるっ！」

いっ！  
いっ！

たっ  
たっ

あ  
あ  
あ

は  
あ

は  
あ







「晴ちゃん最高だったよ。おじさん  
年甲斐もなくハッスルしちゃったよ」

「えへへ♥おじさんも

エッチ上手くて凄かったですよ」

「良ければまた会って下さいね♥」

ボクはそう言うとおじさんと  
連絡先を好感して別れた。



（すごいな、初めて会ったおじさんでこれなんだ。世の中にはもっと凄い人がいるのかな？）

（…はは、なんだかワクワクして来たかも♪）





「頼む！もう止めてくれ！」

「あはは♡だるめ、だって誘ってきたのは  
そっちだよ。だからボクが満足するまで  
頑張ってね♡」

んん

あッ  
あッ

いっ！  
いっ！



「くぅっ…ぐ…っ…」

「はぁ♡んっ♡はぁ♡ぶっといので  
ミチミチ広げられながら出されて…っ♡  
あぁっ♡これ結構いいかも♡」

あゝ  
あゝ

いっ!  
いっ!

はぁ♡  
♡♡♡



「う、ぐ…っ！…これ、以上は、まず…っ！」

「ほら、ほら♥もつと突いて♥ボクの中  
気持ちよくて、いっぱい出したいでしょ？」

「…くっ…うぐっ…もう…っ！む、り」

んん

あッ  
あッ

いっ！  
いっ！

はあ♥  
♥  
♥







びゅぶるるるるっ！

「あはっ♥すご…っ♥射精されながら  
突き上げられるの気持ちいいっ♥」

ビュン！

ビュルルン！

はぁんっ♥

はぁ♥

アッ  
アッ

110ッ！  
110ッ！

何度めかも分からない射精が膣内を満たす。  
だがそれだけでは満足できずボクはさらに  
腰を振る。

下の男を無視するかのよう激しい動きで  
腰を振り精液を絞り続ける。



数時間後…

「はぁ♡はぁ♡んっ♡  
久しぶりに満足したかも♡」

「…って、やばっ！この人、意識がない！」

はぁ♡

アッ  
アッ

いっ！  
いっ！

はぁ♡

はぁ♡





「ふう…。良かった気絶している  
だけか、流石に焦ったよ」

「…やっぱり少しやりすぎたかな？」



ボクはおじさんとしたあの日から誰彼構わずセックスをするようになっていった。もちろん最初は抑えようとしていた。でも性欲が強くなって止めようにも止まらないのだ。



(んゝやっぱり最初に合ったおじさんに  
会いに行こうかな?あの人絶倫ぽかったし)





「ふっ！くうっ！上手くなっとな晴ちゃん」

「へへ♪でしょ♡色んな人と  
エッチして勉強したんだ♡」

「なるほど、どうりで……っ！」



「んちゅ♡じゅる…っ♡ちゅ…じゅぷぷ♡」

「っお！やば、一回出すぞ晴ちゃん…！」



「んぶっ♡ん…っ♡じゅる、じゅるるっ♡」

(やっぱりおじさんのドロドロ精液おいしい♡  
それにおじさん絶倫だからいっぱい楽しめる♡)





「なあ、晴ちゃん。そんなにし足りないなら  
おじさんの恋人にならないかい？」

「もしなってくれたらもっと気持ちいいことも  
して上げるよ」



「んっっ、確かに満足できないことも多いけど……ごめんね？」

「ボク、沢山の人とエッチしたいからおじさんのモノだけになって上げられないかな」



「それにおじさんのおちんぽ、おつきくて  
気持ちいいけど、ボクは小っちゃいのも  
太いのも色んなおちんぽが欲しいんだ」

「あはは！晴ちゃんは好きモノすぎて、まるで  
淫魔みたいだな。なら、おじさんとしたく  
なったらいつでも呼んでくれていいからね？」

「うん♥ありがとう、おじさん♥」





(気持ち嬉しいけどおじさん二人の恋人になつたら本当に絞殺しちゃいそうだしね)

(やっぱりお気に入りの人には長生きしてもらいたいしね♪)



(…ふふ♪それにしてもセックスしただけで  
皆がボクに夢中になって愛してくれるんだな)

(こんな簡単なことで人から求められるなんて、  
ボク女の子になれて本当に幸せだ♡)































































































































































































































































